

安井 聖 著

『アタナシオス神学における神論と救済論』

関東学院大学出版会、2019年

戸田 聡  
TODA Satoshi

本書は、立教大学大学院で学んだのちさらに東京神学大学で勉強を続けて主査・関川泰寛氏のもとで博士号を得た安井氏が、自らの学位論文を若干修正の上公刊したものである。本文が248頁、注が54頁で、注の多くはギリシア語原文の引用から成る<sup>1)</sup>。さらに参考文献表及び索引が計20頁、そしてあとがきとなっている。アタナシオスという4世紀の教父に関する本格的な研究書であることは以上の外形的観察からだけでも明らかである。

序論「本研究の目的と方法」では評者は早速疑問を覚えた。例えば、アタナシオスについて特段研究したわけでない往年の大教父学者ハルナックへの言及は、あまり有意義でないように思った。長めの引用の典拠である『キリスト教の本質』は、教父学者よりむしろいわゆる自由主義神学者としてのハルナックが強く出た書物だと解するべきではないか。また、「救済論にこそアタナシオスの中心的な関心が向けられているとする理解」（3頁）に立つ研究者が列挙され、「これに対して、むしろアタナシオスの神論こそがその救済論を基礎づけていると考える研究者たちが存在する」（同）とあるが、

---

1) 但し、重複する内容の注が複数見られる場合がかなりあった。以下、網羅的な列挙でないが（ローマ数字は「第1部」または「第2部」を表す）、I n.92 = II n.7; I n.93 = II n.8; I n.95 = II n.10; I n.146 = II n.47; I n.182 = II n.54; I n.202 = II n.105 = II n.280; I n.205 = II n.109; I n.206 = II n.110; II n.106 = II n.281。また、I n.97 は II n.102 に、I n.121 と I n.122 は II n.103 に、I n.153 は II n.104 に、それぞれ含まれており、II n.61 は I n.184 に、II n.72 と II n.91 は I n.157 に、II n.92 は I n.188 に、II n.93 は I n.184 に、それぞれ含まれている。

双方の立場は矛盾も対立もしない。そして安井氏は「アタナシオスの神論が救済論を基礎づけていることを、本研究において論証したい」（4頁）と述べるが、これ自体は論証不要な自明な事柄である。ただ、以上が呈するのは論述の仕方にかかわる問題であり、本質的なものでは必ずしもないだろう。

第1部「アタナシオスにおける神の善性の理解」は4章から成り、第1章「中期プラトン主義とオリゲネスにおける神の善性の理解」では後段の議論の前提として、当時の哲学と、及びアタナシオス以前のアレクサンドリアの神学者であるオリゲネスの思想とが提示される。古代ギリシア哲学を厳密な意味での専門とするわけでない評者は細部への立ち入りは差し控えるが、第一の神或いは至高神或いは「父」が「善のイデア」或いは「善それ自体」などと称されているという点は留意されるべきだろう。

第2章「『異教徒駁論』における神の善性に基づく自己啓示」で安井氏が目指したのは「『異教徒駁論』は、神がその善性に基づいて自己啓示をしておられることを論証することを目指して、その議論の全体の構造が形成されている」（51頁）ということ論証することだが、氏はここで「神」として父なる神を念頭に置いているようで、この理解は評者を驚かせた。なぜなら、新約聖書には父なる神について「いまだかつて、神を見た者はいない」（ヨハネ 1:18、新共同訳からの引用。以下同様）「神は……唯一の不死の存在、近寄り難い光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることができない方です」（1テモテ 6:15-16）とあり、その神が自ら進んで「自己啓示」をすることはわかには信じがたいからである。

そこで第2章を詳しく見ていくと、まず37頁では「十字架が神を啓示する出来事である」との安井氏の理解が示されているが、同頁に見られるアタナシオスの著作の引用の要約としては不正確である（十字架に上られた方が救い主である、というのがアタナシオスの主張だろう）。次いで38頁からの第2節「神の自己啓示を受け入れない人間の偽り（『異教徒駁論』第2～29章）」では、6つほど見られる引用箇所の中に「神の自己啓示」に当たる表現は見られない。43頁からの第3節「神の善性に基づく自己啓示（『異教徒駁論』第30～47節）」で注目すべきは46-47頁の引用だろう。

善であられ、人間を愛し、ご自分がお造りになった魂に関心をもたれる神は……人間が無から想像されたために神の知識を獲得し損なっているので、ご自分のロゴスによって被造物を秩序付け、その結果、神は本来見えないお方であるにもかかわらず、その働きを通して人間に知られるようにされた。

この訳が正しければ、神の自己啓示という氏の主張は不可能でないだろうが、実際には「神は本来見えないお方であるにもかかわらず」は正しくは「神は本来（或いは「本性において」）目に見えないお方なので（ἐπειδή）」である。したがって、この引用で言われているのは、人間は神についての知識を被造物を媒介にして得ることができる、ということ以上ではない。

一番肝心なのは 50-51 頁の引用だろう。

ご自分からお生まれになった善にして創造者なる御子をもちながら、御父はご自分を被造物から隠すことをなさらず、(中略) ご自分を毎日すべてのものに啓示しておられる。

この訳が正しければ、神の自己啓示という氏の主張は全く可能だろう。だが、訳文中「御父はご自分を被造物から隠すことをなさらず」は正しくは「御父は彼 [すなわち御子] を被造物から隠すことをなさらず」であり、「ご自分を毎日すべてのものに啓示しておられる」は正しくは「この方 [すなわち御子] を毎日すべてのものに啓示しておられる」である。つまり正しい訳文は

ご自分からお生まれになった善にして創造者なる御子を持っておられて、御父は彼を被造物から隠すことをなさらず、(中略) この方を毎日すべてのものに啓示しておられる。

である。つまり、引用で言われているのは御子であるキリストの日々の啓示であって、父なる神の、ではない。アタナシオスは聖書に書かれていることを全く超越していないと解するのが妥当である。もちろん、ヨハネ伝に「わたしを見た者は、父を見たのだ」（ヨハネ 14:9）とあるので、神の自己啓示をなお主張することは可能だが、ともあれ「父なる神による自己啓示」をアタナシオスの言っていることだと主張するのは正しくない。

この点にしつこくこだわったように思われるかもしれないが、本書では以後、特に典拠の明示なしに「神の自己啓示」という表現が繰り返し用いられしており、適切とは言いがたいため、やむなく指摘した次第である。

次に第3章「アタナシオスの『ロゴスの受肉』における神の善性」（53-71頁）では、ロゴスが受肉したのは神の善性に基づいている、などとする議論が行なわれており、その限りではもちろん評者に異論はない（但し、57頁他の「神の善性に基づく自己啓示」という表現は、上述のとおり「自己啓示」という理解に問題があるので注意を要する）。ただ、神の「善性」という言葉がアタナシオスの神学においてどれほどキーワード的な働きをしているかどうかについては疑問の余地なしとしない。例えば本文 58 頁に付された注 157（265 頁）の箇所ではアタナシオスは確かに「善性」という語を使っているが、その文脈は次のとおりである。

……お造りになっておきながら、ご自分のみわざが減びるのを見過ごしになさるのであれば、その無頓着のゆえに、神の善性よりも無力のほうにさらけ出されることになる。それよりは、初めに人間をお造りにならないほうがよかつたであろう。

この箇所の原文は次のとおりで、

*Ἀσθένεια γὰρ μᾶλλον καὶ οὐκ ἀγαθότης ἐκ τῆς ἀμελείας γινώσκειται τοῦ Θεοῦ, εἰ ποιήσας παρορᾷ φθαρῆναι τὸ ἑαυτοῦ ἔργον, ἢ περ εἰ μὴ πεποιῆκει κατὰ τὴν ἀρχὴν τὸν ἄνθρωπον.*

「神の」は、その位置から見て、「無頓着」「善性」「無力」のすべてにかかる  
と解釈するのが妥当である。とすると、その部分の訳文は

(前略) 神の無頓着のゆえに、神の善性よりも神の無力のほうが (後略)

と訳するのが正しいことになる。ここで用いられているのはもちろん非事実を  
表す表現だが(「神の無頓着」や「神の無力」などということは実際にはあ  
りえない)、そうだとすると、少なくともこの箇所では、「神の善性」とい  
う言葉がそれほど積極的に用いられているようには見えない。また、注 168  
(267 頁) では「善性」というギリシア語が 2 度出てくるが、文脈から見て、  
語られているのは 2 度ともロゴスの善性である。これに対して、安井氏の  
上述の「神の善性に基づく自己啓示」で念頭に置かれている「神」は父なる  
神である。神の善性に関する分析は、再検討が必要なように思われた。

この調子で見ていくと到底紙幅が足りないので、次に飛んで第 2 部「ア  
タナシオスの救済論」の第 4 章「『アントニオスの生涯』におけるアタナシ  
オスの救済論」を見ておきたい。第 1 節では『アントニオスの生涯』の著  
者問題が論じられている。これについては評者は拙著『キリスト教修道制の  
成立』の中の 1 章で論じたことがあるが、本書では完全に無視されている。  
ただ、この点については評者は苦言を呈するつもりはない。評者自身、拙著  
公刊の 2 年前に刊行された関川泰寛氏のアタナシオスに関する著作の中の  
関連する議論に、上掲拙著の中で全く言及しなかったからである(意図的で  
なかったとはいえ、評者の側に弁解の余地はない)。他方、第 2 部第 4 章で  
は、評者が訳出・出版した『アントニオス伝』(『砂漠に引きこもった人々』  
教文館、2016 年、に所収) からふんだんな引用があり、(作品名が変えられ  
ているところから推測できるように、氏はことさら拙訳を使いたくはなかつ  
たのかもしれないが) これには訳者として感謝せねばならない。ただ、どう  
せ引用するなら(拙訳中の気に入らない表現の修正は仕方ないとしても) 正  
確に引用してほしいと思う箇所がなくはなかった。例えば 200 頁、「邪悪な

悪魔」とあるが正しくは「邪悪な悪霊」である。また202頁、拙訳にない一文「なぜならわたしたちには十字架のしるしと、我らの主に対する信仰という守りの壁がある」が最後にあり、拙訳の訳し漏れかと思ったが、同じ原文はその前で訳出されており、つまりこの一文は原文の2度目の訳である。

もはや紙数が尽きている。以上、著者にとっては極めて不愉快な論評となってしまったかもしれないが、残念ながら「神の善性に基づく自己啓示」という氏の表現でつまずいてしまい、以降、その表現が出てくるたびに一々頭の中に疑問符が浮かぶこととなってしまうのは、評者が本書全体を氏の提示するとおりに提示できないことは致し方ないと言うほかない。

とはいえ、大量のギリシア語を読みこなして——如上でいくつかの箇所に疑問を呈したが、概して氏が正しく読んでいることは確認できた——4世紀の教父などという、そんなものを読んで今さら何の役に立つのかと思う人が大勢いても不思議でないであろうような、そのような対象を研究することは、決して容易な業でなく、ともかくも一書を書き上げた労苦に対しては、氏の考えに同意するしないにかかわらず、賞賛を以て遇するのが正当だろう。評者もまた、そのような賞賛を惜しまないつもりである。

(北海道大学大学院文学研究院准教授)